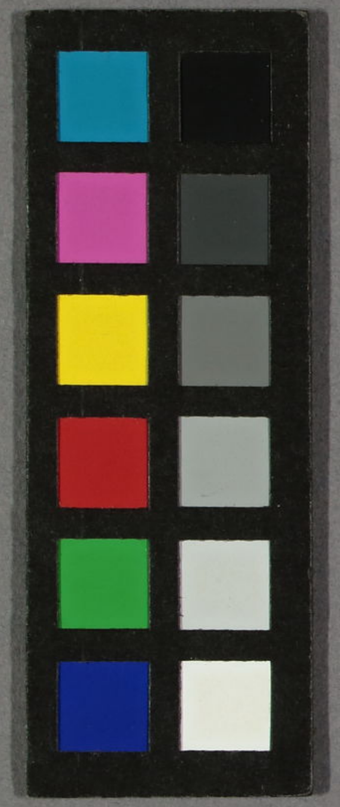
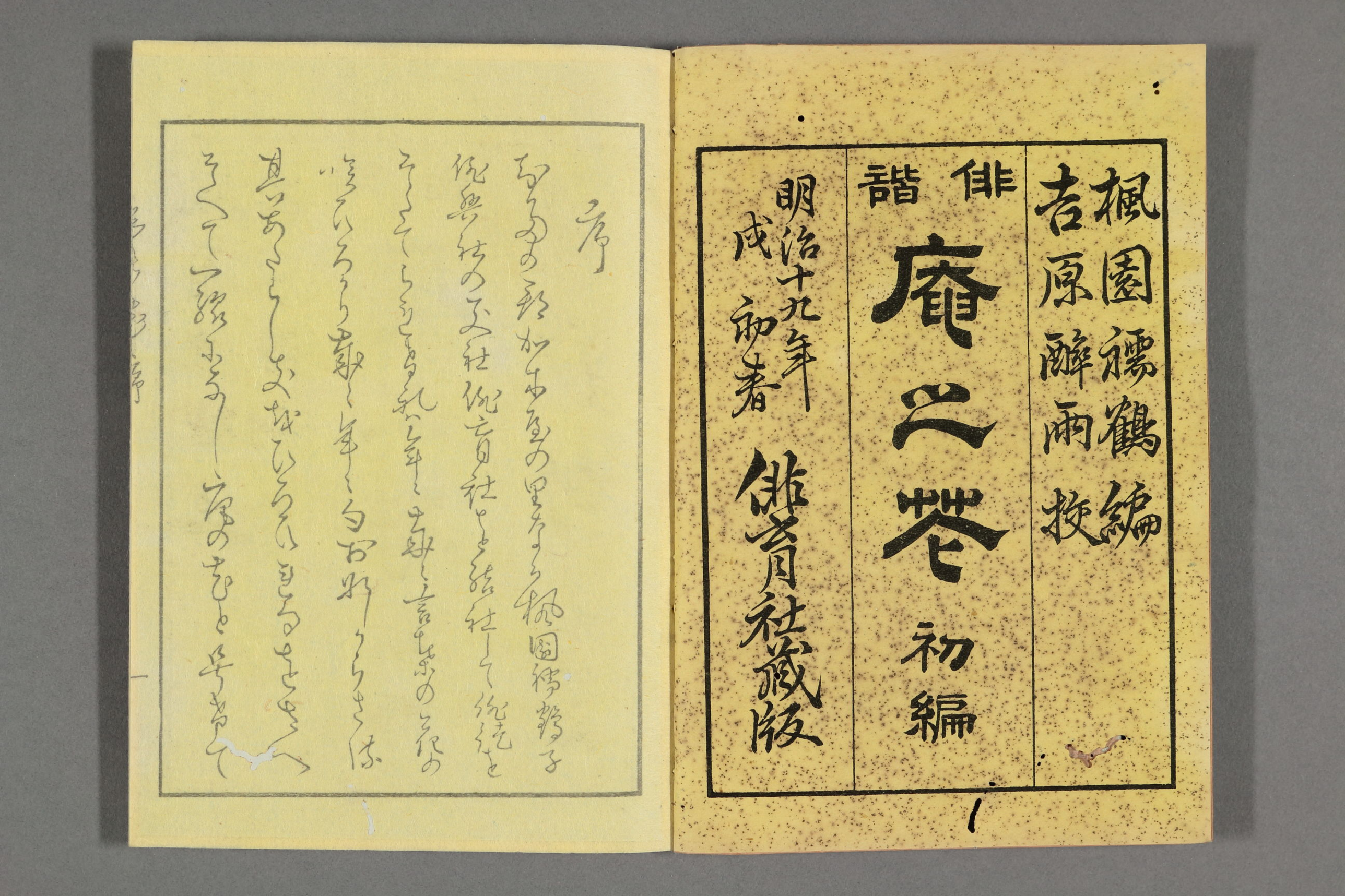
俗説庵主記





楓園禮鶴編
吉原醉雨校

俳諧庵芝 初編

明治十九年
成初春

俳諧社藏版

序

[illegible]

[illegible]

[illegible]

明治十九年成る

[illegible]

雜俳

庵の花　初篇

春秋部

たつたやの何をたてくる日の白し　大坂　陳水

[illegible]　京　志

[illegible]　安人

[illegible]　尾り　靜所

[illegible]　江戸　木角

[illegible]　尾り　乘谷

[illegible]　可洗

[illegible]　杉翠

人の機嫌咲の山まりゝや尾花　東京 醒松
咲やうし誰ぞ世れも直に行　、文礼
垂く寒る風の止みて梅の香　ビンゴ 暁谷
取の香に見る銀風の花より水　ミカハ 石芝
春の雪池の和子流れつゝ行　仙タイ 甫山
菜の花に懐爐宿かえお守る月　スルガ 乙彦
野らに出もみどりの上手雲雀かな　シナノ 松渓
柳ちや眼の伸く空や池の水　イセ 蒲中
妻の手折てやらで梅の香　、墨想
蕗子見てに不足を其日まで花咲ぬ　ブゼン 瓢舟
春の月の子のせん背案の月　イヨ 鶯居

春の夢の咲人にあるや風呂黄ひ　、未虫
明る餅や霞みたの山の塔ら　上総 旭斎
野や山や春におくれん古の風　谷連々
萬代や何ともしれぬこの宿ん　遠江 十湖
かの紅りの紅を投杂に流さる船　、木涅
咲さもて銷戸のもとの姉さ花の香　尾張 梅窓
冬の蓋まで手折の菊まで有　、四朗
一日や躰を清むる表の山　、鶴雄
路の花やみちゃ千代の君　、垢人
花酔されとめつゝしもし梅　西京 稲竹
けふ手れ人である春の寺　、稲雄

ゆくとしの名ごりをしみや花の毛
野ゝを移に走る春の水　　サスキ　梅盛
やり羽根やよろんなきこゑ一毛　　長海
夢へかる月こそ情梅のもと　　二葉　　屋入り
うゑ鶯やあるも淋しき夜ふけ　　花月
ゆくとしの月日の流れそろひ　　梅月
　　稲雀

夢のうはさ一国原こゑやうる菜畑　　稲雀
淋しさのうつる笠の陰雪　　雪居
うゑ鶯するとかるとかふ切りて　　梅盛

梅ゝ盛ほのゝ海　梅盛
行雪のよろ沢橋の沢山あり　　雪居
水鼎よりとぼきく新米　　梅盛
古巣田舎ゝ月に移ゝ　　梅盛
そゝちよりそゝちぬ初恋　　雪居
沢ゝとて羽織よりさ紙衣　　梅盛
題いきけとる芋ゝ　　雪居
中尾のこと一仏のよ新ふよ蔵り　　梅盛
有よるゝ出る蕎の月　　雪居
尺伸い勝敗ゝるう仕事ふて　　梅盛
命い寒世を蕎りとれ　　雪居

多賀子といふ女性を聖子と云ふ
このたゞ一人なる御乃彩色
雅子の家の家風の使ひ方
ちよつと色て居る事解
家もとより四ツ時を義度を
自分で考へて考へ抜き
殺今の流行語も薬東
約束用社でやい云縁
この四ツ時の時
十数年前とて深夜に幕
國家の為いとゞ
彩色
居
彩
居
彩
居
彩
居
彩
居
彩
居
彩
居
彩
居
彩

来待つもとゝ
何事も騒の時乃行男
根のうくにひとり頼扶
のつほりと自を
時の紙と家風の
時とあと家風の
戻り聲とゝ
宮様の所為
ほんて
約束よ一緒
子供家の
彩
居
彩
居
彩
居
彩
居
彩
居
彩
居
彩
居
彩

夏の初

杉の木の花の長く垂れたるを見て

麦秋の果てすでに高く成りて

人の呼れたるを聞て初鰹

形代やさてはきこえの世を切

菖蒲湯や浮寝をかこつ池

芋掘るや老の移やこのうつり

ふる雨の出来ぬ思ひやとしの内

蛍狩して面白き自然の変

美濃にて芋掘る亀

赤水 永機
、高雄
、青豆
、精方 尾州 南
、英富
、立義
、武夏 大阪 南歌
、文淵

時雨日も行くそひて初鰹

ひとりつゝ用き細道のおもの風

ゆるやかに高ひくゝ動く牡丹哉

麦秋やふるの神社世界

高ちやのつゝとて見て鳴る鶯

美濃路の長のてくゝ名所ぶり

、小寒
、阿波
ミノ 蕗屋
加ゴ 二葉
上野 乙鶴
尾ハリ 穂翁

時雨の行衆に色てあちの空

水鶏一つ鳴る河骨の花

笑ふ藤へ稼ぐ男ふたりのみて

潮文
穂翁
文

はるかの法師僧侶を家に
招くと共に先のさしかふ角の法
師とともに嵯峨の奥の尾
張の国の社の祭りの獅子踊
踊り狂ふと聞く音も懐かし
三月の末洗濯物のちらほら乾き
はたらくおかみさんやうの悪人
らい中を降る雨に乾くものれ
巨燵の中に頭を突込む
陽の当る所に出てゆるり
向うの畑の里

鈴水鈴水鈴水鈴水鈴水鈴水鈴水

若葉の中に蕗の切株の新芽である
まけさ鈴から梅雨に入られぬ
雪洞のつくりと言ふ赤の午
後猫の雛子をひつ提て五
六人に義姉ひの面影が
後ろ向きする者ふとこ
ろ
いとまごひして別れしのちさつき
出かけ法師なる者の
衝とつくと酒のまされる
次に下られた年賀状の
神々も結局来れば参られて

鈴水鈴水鈴水鈴水鈴水

掃集めるの夢の山のと　水
戸を標の國ひを一つる係曲突　鈴
庭ひ訪の巻ひ剃まる　水
角ちを一巡て郭ちれ巻　鈴
仕舞後の掃るの鍬る　水
紅葉見る計當たる蕎麦　鈴
寺と村と社間さとき家　水
連る集るの他器物一　鈴
二ての鍬を吉て吉仏まる　水
京の流れきころ社宿居り　鈴
日に高たきとうらるなる　水

秋志郎

高浜　寿哉
、默平
、孫坪
、之引
高浜　露村
、秋穂
、牡丹
、素陽
、茶話

大坂 雲笠
仲哉
豊後 竹舎
、鉢書
岩シロ 長撥
大和 水石
ヒゴ 菊路
肥後 旭扇
、逸我
、時雲
、中傳

尾ハリ 関老
、雑風
、柳坡
、中扇
、光象
、稽物

加州 拾山
稽物
加州 圃木

ゆるやかなりさて月のやどりる
孫ゑくゐ四月雅の花らくと　　鶴
綱と樽とを通ふ川舟　　木
まゐ四つ月ゆ月行かたてと雪　　山
酌る毛氏を順ゆ重ねる　　鶴
五十ゆいとゐ孫めてかまゐ三ゐき　　木
あゐてれまいて言てをぬ意　　山
山峯を社ちる雲を咲候　　鶴
四ゐ弟ゆ雨ある雅の月　　木
仏御の伽ゆ話のゐる　　山
燈鉢火ゆ人ゐ意い傳る　　鶴

波のゆる社こゐれゐ橋ゐて　　木
雲のとれゆ雨ある言の鶴笠　　山
花の咲ゐゐ年刻の鶴のゆ　　鶴
流ゆゐくゐ毛元仏雅　　木
ゐ風活て振る蛤のゆつくと　　山
とゆ仏倉ゆ借ゆの智恵　　鶴
行ゆりゆて水ゆれぬ風ゆの　　木
水ゆゐ一四郷居ゐる　　山
人ゆ毛社扱ひゆ社ゆて形ゆ　　鶴
和激りゐとゆれゐゆり　　木
雪倉いまゆ四石の雨傳り　　山

ゆるるこゝあらぬ時やの
夢こゝ葉抽居まゆをいまそて　　詩
日結よ蕎ハ古ひ　　句ひ　　山
遊ふ可ゆ事こゝ多記角の沈　　詩
草物ゆこゝ出ゝ要ゝ出ゝ乱　　木
丸いま秋の茅ゆ丸から　　清　　山
暗ゝと雲ゝ物ゆ中の雪　　詩
友馬の影てゆゝ　　課る　　木
日沈たゝ沈神ゆ丸義新　　山
甘深く這入ゝ流ゝ有ゝ　　詩
秀の年波の新ゝ有ゝ　　木

乃詩

ゆゝ香ゆゝ出ゝ時ゆゝ
ゆゆのゝ沈の沈の琴
書簡ゆゝ日一ゝ
ゆゝ芋ゝ
ゝ抽ゆゝ
ゆゝ沈ゆ
巨燈ゝ
ゆゝ風の耳ゝ
稲ゆゝ沈の陽ゝ
解ゝの新ゝ思ゝ

東京　詢業
イヅモ　曲川
七門　梅宿
カ、　雪袋
、　玉聲
ノト　守朴
サヌキ　貞水
エチゴ　琴丸
四コ　素山
、　喩風

日のうたがのうちに社務の
ちつきや梅乃うぐひす　　ケノ　揺子女
身の出て都のうちの数千寿の郎　　栗　柳浮
明るうに印とく米俗の師走哉　　大阪　連梅
道ひきに付くそいふ夏の蔵哉　　東京　且西
実りもにぬくい日待るか書の孔　　東京　仲丈
夜に草見て小菜は流きの　　イセ　素問
春風の夢の中の都るもとん春　　尾ハリ　接間
芝の中や押の孔まの用の孔　　東京　線子
眼見て社るる蔵つる和々彩の雪　　東京　寧角
さいやは法に面る孫乃垣傳　　東京　酬之
　　東京　鯉友

手の面や弟子よりて名をつける　　尾ハリ　勝角
夜稽古まつりけや　　東京　稽好

山の井は底より深つ玉水の　　菫字
とくとく新よりて三重　　穂鶴
数寄屋ひとりくふ吐くして　　字

仲しき髮を大事と氣をつ
かひ給ふ事ひとしなみなる花
とりく時社をあらとをまた
ものうつ空家のけしきも秋の暮て
ふきたる風にまつの色
給ふよ色授ける秋あくの月
ものきはをいとあはれ
雪は降ぬけて年の
古用家のつゝ思ふみ〳〵身
を町田社まをり芳と呼ぶ者ミ
俳句時ていあるる

字
字
字
字
字
字
字
字

今年祖師の利益いさかゝよ
ちよつと俗なる事なる反故買
屋はもとの家をこの番を居
いくらと値のゆきつもあつ
ものまた川流濯のおつゝ
あるいは徐々敬
懶惰の蹟自らみよ穂引て
ちやうの原のさと梅あつ
和雪は笠よりつゝ降く折ふ
蕉こゝよつ白を出て折
又てる左衣の角ものらく

字
字
、
字
字
字
字
字

[illegible]字
[illegible]字
[illegible]字
[illegible]字
[illegible]字
[illegible]字
[illegible]字
[illegible]字

附録

低育社定有會　接象有所

[illegible]千葉社
[illegible]、堀人
[illegible]、市川
[illegible]、花月
[illegible]、堀人
[illegible]桃友（タカ）
[illegible]芳涯（ヨシヤ）

白いまゝ消へぬ影やきりぎりす　町古 素一
活残す桔梗志ぼむや手桶　ナラワ 晴水
りとせてかの岸へ散る萩ときに濱　ハラ 佛農
月ひとつ微笑しけり投頭巾　苅田 巖雉
豊年や事もなくこえる田所の乳　キダ 木壽
入る人無數程引ひとる月　社 楓月
かのふ見ゆる山寺の里や野の声　タカ 文月
名月や行穢れぬ長堤　山樵
火を焚けいしろ白ける夜寒かな　芳潤
月は名のあるもの雨のきりぎりす　、
指先をあてたとや月の露の山　巌雅

扶て蛙去りて志けば菊兄さ　半田 南洋
志らぎくにいや中に秋の言葉口　タカ 野雄
春て見て過ぎて立暖新酒の瓶　コタ 二石
道間の若菜蔵に桐や菓の出　、
葉の門嘯に薮の蔓の飛　町方 稽村
きらめ鶴なかへ帰るや葉の露　社 西鳥
無深き月も菜の白きかな　、一家
天の仙や宮の日御手り棒　吉川 松雪
野分吹や沖は雲も乙女の色　キタ社中 池六
氷隈や影月やとる花の桶　カメ崎 旦一
小春日や麦死ぬ針のみとりか細　サカヘ 寿山

池のうと敵をのがれて山毒風　正為
須ヶ崎海岸の時雨かな　南洋
被ひつゝ時雨を拾ふや紅葉の雨　桃友
時雨見て足もとは水溜る蔵もさゝ　池六
小春日に岸に釣り堤　この乳　一鶴
蓑を着て傘を傾ぎ雨や　竹雲
ぬれやすいの雪の降らん　久有
猟犬や降初雪に吉野の後　素山
新年や長人の知らぬ葱一抱　池六
降て来るやうに下駄くるるかな　一葉
雪掃て呼ぶ声ばかり庭男　子蒼

うゝ湯よりもあつき戻る寒さかな　二石
餅搗や新り稲のかくれ家　ヒロタ　五竹
煙を出し新米の蔵ひらかれ　垢人
搗移せいなかの人の　修雄
垣外に筆を蓮の実ながら　晴地

こゝろ迄の雲大空いのりて
華やかに稚子数さの世の中を記　刺者　禮輔

歳暮

山為　垢人
路走　為有
桃有

俳育社之家屋敷のいたひよ
貝高年来度うりやはつの花ひ　蓬宇
うゝ紅梅やひとり咲つゝ日の舞る　鈴義
日につゝを知るや梅の近るこゝ　鈴村
昇る日を尚まつ育の鬼うゝ雞　素一
こゝ陰りはゝるあるまい花の番　田海

○

わゝ手いとも梅を出あけて梅の声　鶴雨

俳育社の賀事有ゝまゝを
俳句にて

格ゝ子社ゝのゝうゝひや梅ゝ衣　鶴鶴

○俳育社出版書目

俳諧　庵之花　二編　近刻

明治十九年四月三十日御届
同　年五月二十二日出版

編輯人　愛知縣平民　俳育社々長　久野禰鶴
知多郡加木屋村二拾番地

出版人　愛知縣平民　中島大助
名古屋區本町二丁目拾八番邸